An Analysis of Structure of Tag Question : A Cognitive Grammar Approach

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43376

人間社会環境研究　第30号　2015. 9

付加疑問文の構造の認知的分析

人間社会環境研究科　人間社会環境学専攻
中　谷　博　美

要旨

本稿の目的は，Langacker（2009, to appear）が提唱するAnchoring によるフラクタル構造に基づき，付加疑問文の構造がどのように分析されるのか示すことにある。この分析に基づきコーパスの事例にどのように適用できるのかについて考察する。問題点として，構造分析が適用できない事例が存在することがあげられるが，このことに関して，間主観性（Verhagen 2007）および認知モードのシフト（中村2012）という観点から考察を加える。結論として，付加疑問文は命題を一つのまとまりとして捉え直し，対話者間でその概念内容を共有する意図を動機づけとした認知モードのシフトを表す形式であることを提案する。

Anchoringによるフラクタル構造で付加疑問文を捉えるならば，付加部（tag）が再分析とインタラクションの機能を担って階層性を表していると言える。これをもとにBNCからの4000例を分析した結果，7割以上が典型例であると判断されたが，代名詞が照応しない例と命題が節を成さない拡張例が多く確認された。これらの拡張例の分析により，代名詞の非照応はtagがグラウンドとの関係性の一部を客体化して捉えたときに生じること，命題が節構造をなさないものはIモードの認知様式を反映したものであることが結果として得られた。

概念内容のスキーマ化が認知様式のシフトを引き起こし，階層性を生じさせるというtagの機能は，典型例から拡張例に至るまで共通するものである。拡張例では，英語においても統語構造の中に階層性を含んでいない日本語のようなIモード的表現形式があり，間主観的認識調整を動機づけとして認知モードのシフトが言語化されて後置される構造がみられる。この動機づけはまた，グラウンドとの関係性の一部を客体化する拡張例においても，客体化しない典型例においても共通している。つまり，階層性の創発と間主観的認識調整が付加疑問文の機能と動機づけであると結論付ける。

キーワード

付加疑問文，Anchoring，間主観性，認知モード

An Analysis of Structure of Tag Questions
－A Cognitive Grammar Approach－

NAKATANI Hiromi

Abstract

This paper proposes that tag questions have a recursive structure as a portion of fractal organization based on anchoring (Langacker 2009, to appear), which is reflective of their function for reanalysis and implies cognitive mode shift (Nakamura 2012) motivated by intersubjectivity

(Verhagen 2007). This paper discusses how instances of tag questions can be extended and why they are used in discourse. Interlocutors move their focus of attention from the conception of reality to epistemic status because they are concerned with eliminating the difference between them. A total of 4,000 instances from the British National Corpus show that about 70% of them match the typical structure — [Proposition + anaphoric CORE] — but other types, which have mainly two patterns, can also be seen. One has non-anaphoric pronouns, and the other has non-clausal propositions. This paper concludes that the former pattern is analyzed in terms of intersubjectivity while the latter shows a shift from I-mode to D-mode. Because speakers share their intention of speaking with interlocutors, tag questions, which are extensions of non-anaphoric and non-clausal use, use an interactive system at the end of sentences.

Keywords

Tag Question, Anchoring, Intersubjectivity, Mode of Cognition

1．はじめに

本稿では，Langacker (2009, to appear) により提唱されたAnchoringによるフラクタル構造に基づき，付加疑問文の構造がどのように分析されるのか，分析結果がコーパスの事例においてどのように適用できるのかを示す。問題点として，構造分析が適用できない事例が存在することがあげられる。この点に関して，間主観性 (Verhagen 2007) および認知モードのシフト (中村2012) という観点から考察する。結論として，付加疑問文は命題を一つのまとまりとして捉え直し，対話者間でその概念内容を共有する意図を動機づけとした認知モードのシフトを表す形式であることを示す。

全体の構成は次の通りである。1章では，Langacker (2009, to appear) のAnchoringによるフラクタル構造を付加疑問文分析の概念的枠組みとして提示する。2章では，この枠組みに則った分析が具体事例に適用できるかどうかをBNCにより考察し，典型例と拡張例を検討する。3章では，拡張例の分析において必要となる枠組みとして間主観性と認知モードについて提示する。4章では，間主観性により考察を加えた拡張例の分析を行う。5章では，認知モードのシフトにより考察を加えた拡張例の分析を行う。6章では，全体のまとめを示す。

2．Langacker (2009, to appear) の認知文法に基づく構造分析

認知文法では，言語表現のあらゆる意味に人の認知が反映しているという考え方に基づき分析がなされてきた。Langacker (2009, to appear) において，文構造を意味機能的まとまりで捉える新しい枠組みが提唱され，統語的構造における諸問題についても，その射程となった。この枠組みでは，概念対象の叙述 (descriptive) レベルと談話 (interactive / discursive) レベルという二つの階層を示し，baselineとelaborationの関係により説明を与えている。この関係を示したものが図1である。

ここでは，baseline clauseをinteractive clauseへと精緻化している要素は，極性 (polarity) と発語行為 (speech act) であることが示されている。出来事を表す節 (clause) の中心が存在性 (existence) (出来事が起こったがどうか) にあり，存在性を極性と発語行為により精緻化するシステムを体系的にまとめて配列を示したものが図2である。存在性のスキーマは，CORE [主語＋Vヨ (存在性を示す助動詞) ＋極性・発語効力] という意味機能的まとまりで実現形を成している。

さらに最も重要となるAnchoring (先頭の要素anchorに後続して存在性を示すCOREが現れ，そ

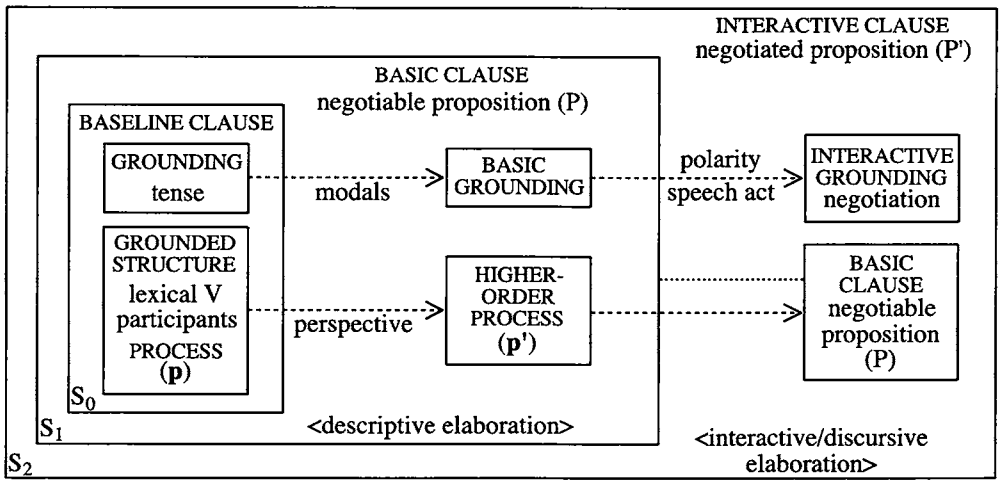


図1

	POS	NEG	AFF	Q	
v/*do*	*He tried.*	*He didn't try.*	*He DID try.*	*Did he try?*	BASELINE
Be	*He is trying.*	*He isn't trying.*	*He IS trying.*	*Is he trying?*	ELABORATION (descriptive)
Have	*He has tried.*	*He hasn't tried.*	*He HAS tried.*	*Has he tried?*	
M	*He will try.*	*He won't try.*	*He WILL try.*	*Will he try?*	
	BASELINE	ELABORATION (interactive/discursive)			

図2

の他の要素が続く）という考え方により，これまでLangackerの認知文法においては扱われてこなかったSAI（Subject-Auxiliary Inversion）などの統語的問題について説明を与えている。

付加疑問文の構造は，この枠組みでどのように捉えられるだろうか。Langacker（2009: 247）によれば，付加疑問文の付加部（tag）とは，「①前置される命題を前方照応したCORE，つまり命題のスキーマ的表象であり，②談話機能と情報構造に基づき動機づけられ，形作られており，③グラウンドとの関係に寄与したり，命題を確立させたりといったインタラクティブな働きを強く持つ」ものであるという。図3に付加疑問文の構造を具体的に示す（Lagacker（to appear））。

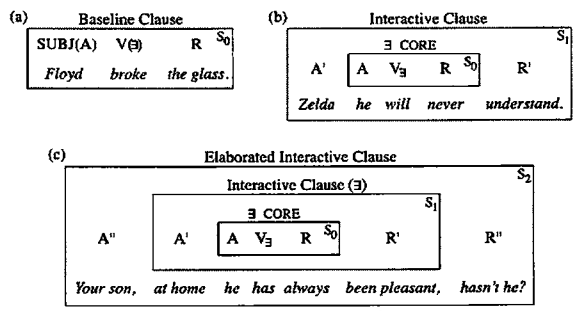


図3

この図では，tagは最も外層におかれ，interactive clauseを精緻化するremainderとして位置付けられている。図のAはanchor（starting pointあるいは参照点），∃は存在性を表すCORE（baseline clauseではV∃，interactive clauseではbaseline clause全体），Rはremainder（その他のclauseを精緻化する要素）を示す。このA＞∃＞Rという連続が階層となってフラクタル構造を成し，文を形成していることを表している。フラクタル構造を成す過程において，A＞∃＞Rというまとまりが一つのCOREとして捉え直されていることに注目したい。S（階層）のレベルが上位になるときは，A＞∃＞Rが一つの∃COREとなって再分析され，さらに上位の階層レベルでは，A'＞∃CORE＞R'がinteractive clause（∃）として再分析され，まとまりを成している。付加疑問文のtagは，まさにこの再分析の機能を果たすと考えられる。前置される命題はA＞∃＞Rで示される一つの存在性を示すまとまりとして捉え直されるために，そのCOREスキーマが表象されてtagとなっている。言い換えれば，tagを捉えるときは常に，Sの一つ上位を想定しなければ機能を見ることができない。この捉え直すという認知の働きを前方照応のCOREである［助動詞＋極性＋代名詞］が担っていると考える。

では，上位の階層におけるtagの働きはどのように捉えられるだろうか。tagによりinteractive clauseがelaborated interactive clauseへと精緻化されるときには，conceptualizerと実際の話し手の関係が決まる。例えば，クイズ番組でThe answer is twenty.と発話されたとき，話し手は出題者であるか回答者であるかは，はっきりとしない。しかし，The answer is twenty, isn't it?と付け加えられれば，話し手は回答者であることが分かる。答えを知っているのは出題者なので，正解かどうかを回答者である話し手が聞き手にゆだねているのである。このとき，conceptualizerが話し手であることが明確になる。つまりinteractive grounding（Langacker 2009）がなされるのである。命題を再分析することは，話し手は聞き手と命題に対する認識が一致しているかどうかについてやりとりをすることを意図している。再分析という意味において，tagは聞き手のメンタルスペースをその構造の中に捉える表現であると考える。フラクタル構造で付加疑問文を捉えると，tagの持つ機能は，命題の再分析と認識的やりとりであると言える。

本稿では，付加疑問文の基本的な構造を［Clause＋前方照応CORE］，機能を［命題＋再分析と認識的やりとり］であると仮定して以下に分析を進める。

3．BNCからの4000例の分析とその問題点

前章で述べた構造と機能について，BNCからの4000例を分析する。対象とするのは，｛命題，［助動詞＋極性＋代名詞？］｝で表される例のうち，助動詞がbe動詞（is, am, are, was, were）またはdoを語幹とするもの（do, did, does）で，極性が命題と異なるものを対象とする[1)]。例文検索により示された任意の4000例（be動詞の肯定・否定tagがそれぞれ1000例，do語幹の肯定･否定tagがそれぞれ1000例）について分析した。ただし，否定辞が命題に明示されていなくても，否定表現（hardlyなど）が含まれているものについては異極性を示すものとして扱った。

分析の結果，be動詞の肯定tagでは513例，否定tagでは781例が｛命題，［助動詞＋極性＋代名詞？］｝の形式で前方照応関係が成立するもので，be動詞の2000例に対して64％を占める。また，do語幹の肯定tagでは625例，否定tagでは861例が｛命題，［助動詞＋極性＋代名詞？］｝の形式で前方照応関係が成立するもので，do語幹の2000例に対して74％を占めている。全体として，69％を超える例が前述の考察に適するものであると判断することができ，典型例と呼ぶのにふさわしいと考えられる。

一方で，これら典型例と一致しないもので，付加疑問文であると認められる例もあった。不一致の方向性を数が多い２つのパターンで挙げると，

①tagの代名詞が命題と照応関係にないもの（171例）と②前置される命題が節の形を成さないもの（240例）に大きく分けられる。ここで，新たな疑問が生じる。Langacker（2009, to appear）の分析により明らかとなった構造とは異なるもので，しかも付加疑問文であると認められる例文が存在するのはなぜか，また，①および②の例文を付加疑問文の拡張例であると位置づけた場合，典型例から拡張例に至るまでに共通する付加疑問文の特性はあるのかという問題である。

以下では，これらの問題に対し，①の例に対しては，Verhagen（2005, 2007）の間主観性，②の例に対しては，中村（2009, 2012）の認知モードのシフトという観点から考察する。

4．間主観性と認知モード

概念化者（主に話し手と聞き手）を観る側，認知の対象を観られる側，その間をconstrual relationshipとするLangackerの視点構図（viewing arrangement）に対して，Verhagen（2005, 2007）は，ヒトの基本的な認知能力である，他者の心的空間を考慮して対象を概念化することが，この視点構図では捉えきれないとした。そして，他者の心的空間が概念化に反映された言語現象を示し，視点構図の修正を試みている。言語表現の概念化者つまり認知の主体を2者であるとし，対話者間のやりとりにおける心的空間が概念化に含まれているという考えである。この間主観性（intersubjectivity）は，否定表現や談話標識を捉える概念である。ここではI thinkの把握構図（construal configuration）を具体例として取り上げる。

図3は基本となる把握構図である。この図では，グラウンドは認知主体1と認知主体2の二人とその共有する知識及び共通認識から成っている。認知主体1（一般的には話し手）と認知主体2（聞き手）が概念化の内容に共同注視し，共通認識を更新していくことが発話だということである。この二人の認知主体が互いに観点を読みあって間主観的に認識を調整しているというわけである。Langackerの視点構図では，一人の認知主体が概念化の内容を形成するものであるため，複数の認知主体の調整による共通認識の形成過程が詳述されなかった。図3のような把握構図により，二つのメンタルスペースが関与しているような表現の差異を捉えることができる。例えば，図4で示されるepistemic markerとしてのI think（you knowなどと同じもの）は，認知主体1と認知主体2およびその間主観的認識調整を含む部分がプロファイルされている。図5で示される客体化された概念対象としてのI think（I thoughtなど屈折を伴うもの）は，認知主体1と概念化の対象および共同注視がプロファイルされている。同じ言語表現においても，プロファイルされる部分が異なっていることがはっきりと示されている。

また，中村（2009, 2012）は，Langackerの観る・観られ関係のみに基づく認知構図に対して，言語間の差異や言語変化，言語進化といった言語の動的側面を十分に捉えきれないところがあるとして，言語表現の概念化者を認知の対象の内側に置く認知様式を提案している。観る・観られ関係のみに基づく認知様式をDモードとし，その対極にある認知様式としてIモードを示し，Iモード

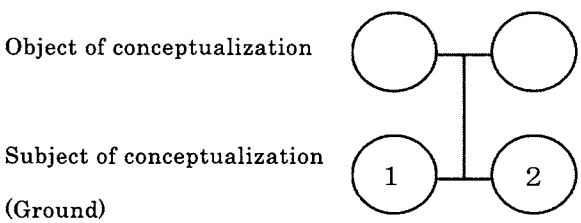


図3（Verhagen 2007：60）

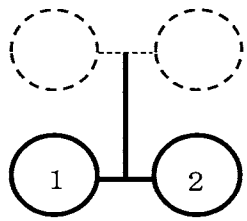


図4（ibid：69）

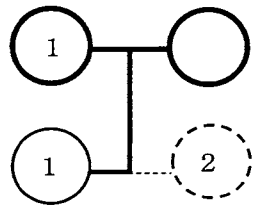


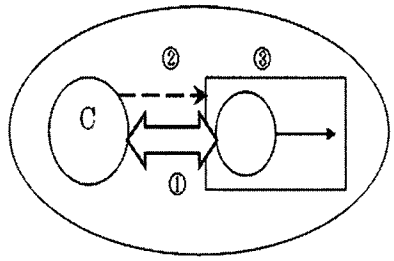
図5（ibid：71）

からDモードへのシフトという考え方を導入した。Iモードとは，＜イマ・ココ＞で対象と直接触れ合い，相互作用しながら体感するような認知様式であり，一方Dモードとは，対象と対峙しいわば客観的に分析的に対象を認識するような認知様式である。このIモード認知様式により，例えば1人称代名詞を省略したHope not. のような「話し手が強い親近感により聞き手にも自分と同じ観点をとらせている」(Langacker 1985: 138) 文を捉えることができる。この例文について，「1人称代名詞が表現されないのは，話し手と聞き手がいわば同化していて区別があいまいになるためであって，認知主体が観る側に徹していて，観られる側に位置しないためではない」(中村2009) としている。この表現は，まさにIモード認知を反映しているということである。以下の図6に2つの認知モードを示す。

また，言語進化とある程度平行的と考えられる子どもの言語習得の観点から，図4のepistemic markerとしてのI thinkは，子どもが初めに習得していくが，この付加的な要素で，認知主体の主観的な判断（Iモード）の自発的な表現が客体化されて，図5の自らの判断を叙述（Dモード）しているようなI thinkを獲得する。このことは，IモードからDモードへのシフトを反映している(中村2009)。Iモードの認知様式を示す認知主体の自発的表現から，認知主体自身の考えを外から眺めるDモードの認知様式を示す表現へと広がる過程により，自己のメタ認知を獲得していく過程を観ることができる。

間主観性と認知モードという新たな観点は，ともに言語の「再帰性」を捉えている。言語の「再帰性」とは埋め込み構造，つまり「何層にもわたる繰り返しの螺旋状構造」(Tomasello 2008) にある。この多層性は，ヒトの相手と自分が同じ認知能力を持つことを認識する能力を反映している。間主観性においては，話し手と聞き手の2者をその言語表現に含むものとして捉え，認知モードにおいては，自己のメタ認知により客体的な自己を獲得する前段階であるIモードの言語表現を捉える。この「再帰性」についてtagの機能的分析を通して次章以降でさらに議論していく。

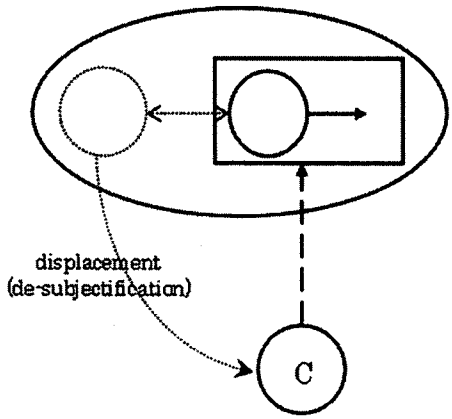
本章では間主観性と認知モードを概観してきたが，両者ともにLangackerに基づきながら，その基本概念を修正している。本稿では，基本概念をLangackerに基づき，拡張例をこれらの新たな観点により捉えることで，その修正を試みる。



外側の楕円：認知の場(domain of cognition)　C：Conceptualizer(認知主体)
① 両向きの二重矢印：身体的インタラクション
(e.g. 地球上のCと太陽との位置的インタラクション)
② 破線矢印：認知プロセス (e.g. 視覚や視線の上昇)
③ 四角：認知プロセスによって構築される認知像 (e.g. 太陽の上昇)

(中村 2009: 359)

Iモード



(中村 2009: 363)

Dモード

図6

5．命題とtagが非照応関係にある拡張例の分析

ここでは，①tagの代名詞が命題と照応関係にないものについて分析する。具体的な例を挙げ，Langacker（to appear）に沿った構造図と間主観性（Verhagen2007）に基づいて考察する。

(1) I think it's on the thirtieth, isn't it?
(2) I think we have to watch this situation very carefully, don't you?
(3) Martin was just leaving when Stephen rang, weren't you?

(4) Harry will, won't you?
(5) He's going to turn it over to professor Mcgonacal, aren't you?

（「映画のシナリオ&原作本を読もう」より）

(1)は，命題が補文構造を持っている例である。命題の主節ではなく，補文節［it's on the thirtieth］とtag［isn't it］が照応関係にある。このパターンと同じ形を持つものは，be動詞が27例，do語幹動詞が30例であった。(2)は，命題が補文構造を持っているが，主節［I think］とも補文節［we have］ともtag［don't you］が照応関係にない。同じパターンのものは，be動詞では例がなく，do語幹動詞では82例であった。(3)は，命題［Martin was］が補文構造ではなく，tag［weren't you］との照応関係もない。同じパターンを示すものは，be動詞では5例，do語幹動詞では27例であった。このように代名詞が照応関係にない例文は，do語幹の例に比較的多くある。(3)の拡張例を分析するにあたり，よりはっきりとしたコンテキストが必要となるため，同じパターンの例文を映画Harry Potterシリーズから示す。(4)と(5)については，登場する人物，その関係性を加えて論じる。

(1)の例は，I thinkをAnchorであると捉えることにより，比較的容易に解釈できる。このパターンではI thought，He thinksなどのように屈折が認められる例がない。このことからも形式の定着したAnchorであるとすることに矛盾がないと言える。図7に示すように，A'［I think］>∃CORE［it's on the thirtieth］>R'［isn't it?］となり，上段に示した上位の階層においても，下段に示したCOREにおいてもA>∃>Rの構造が表れている。

(2)の例は，(1)に比べて，より間主観的に認知の主体を捉えていると考えられる。補文節は，主節の一部であると捉えられており，ここではその存在性についてのやりとりはなされていない。むしろ話し手と聞き手のやりとりの主要な関心事となっているのは，補文節で示される話し手と聞き手の命題の認識についてである。そのため，命題より高次のレベルにある主節のさらに外層を示すtagとなっている。補文節を含む主節全体が一つのまとまりとして捉え直され，tagで示されるR'を伴うinteractive clauseとなっているのである。(1)ではAnchorと捉えられるI thinkは(2)では主節であると捉えられる。Verhagen（2007）では，図4のように，(1)のI thinkをepistemic markerであるとする捉え方と，図5のように(2)のI thinkをそれ自体が認知の主体かつ対象となっているとする捉え方が示されている。この考え方に従って，ここでも(2)では認知の主体，つまりグラウンドが客体化されて表れているとする。(1)のパター

A'	∃CORE			R'	
A'	A	$V_{∃}$	R	$V_{∃}$	R
I think	*it*	*'s*	*on the thirtieth,*	*isn't*	*it?*

図7

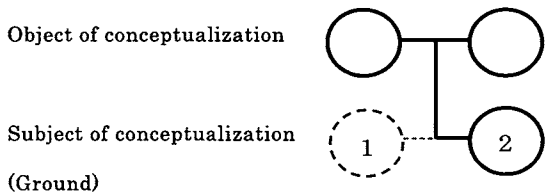


図8 (Verhagen 2005: 121)

ンはI thinkの他に，I mean，I expectなどの談話標識のように，一定の形式で語形変化を伴わないが，(2)のパターンにおいては，I thoughtなど語形変化を伴う例があることからもより客体化されていることがわかる。I thinkに対してtagがdon't youと代名詞が非照応となるのは，tagが疑問文であるため，認知主体2を客体化の対象とするためであると考えられる。つまり，図8のように認知の対象と認知主体2をプロファイルする表現形式となっている。

Verhagen (2005) では，特にDo you think～？について，I thinkと認知主体のプロファイルにおいて対照的なmirror imageであると提案している。このmirror imageであることが，代名詞が非照応であるにもかかわらず，英語話者にとって比較的自然な表現であると認識されるゆえんであると思われる。このように観察すると，主節が認知主体1をプロファイルし，tagが認知主体2をプロファイルするこの形式は，間主観的認識調整をオンステージにおいて行っている形式である言える。認知主体の認識的調整をオンステージにおくことが言語における再帰性の特徴の一つである (Verhagen 2005: 98－99) とするならば，このことは，補文節とtagが再帰性という観点において類似した要素を持つことを示唆している。両者は同じ認知的働きをすると考えられるので，補文節において命題を一つのまとまりとして捉えているのと同様に，tagにより命題を一つのまとまりとして捉える認知が働くと考えられる。図9にあるように，上段に示した上位の階層がこのことを表しており，COREとして捉えられるのは，I think節全体となる。

(3)の例は，固有名詞Martinがtagではyouに再分析されて置き換えられていると捉えられるが，コンテクストがあいまいであるため，(4)と(5)の例によりその分析を進めていくこととする。2つの例で登場する人物は3人である。友人関係にあるハーマイオニー，ハリー，ロンの3人で，2つの例はいずれもハーマイオニーが話し手となっている。

(4)では，3人がともに場面に登場しており，ハーマイオニーが2人に話しかけ，先にロンが答えている。そのあと再びハーマイオニーが(4)のように発話し，ハリーがそれに答えている。(4)の命題の具体的な内容は，「ハリーが手紙を書くこと」である。代名詞は照応していないが，*Harry*と*you*は同一人物を指している。命題では*Harry*とし，tagでは，*you*としている。場面としては，三人が対話しているところである。話し手は，始めは*Ron*と話していたが，その途中で*Harry*のほうを向いて話している。ここで留意したいのは，*Harry*と言及した人物をtagでは*you*と再分析している点である。代名詞照応が成立しない拡張例においては，この再分析と認識調整が肝要であると思われる。つまり，再分析する際には，話し手は聞き手と命題の認識調整をしたいという強い動機があり，命題と聞き手*you*との関係性が強い場合，非照応の付加疑問文が用いられると考えられる。この構造を図10に示す。

A' / ∃CORE			R'	
A	$V_{\exists}$	R	$V_{\exists}$	R
I	*think*	*we have to watch this situation very carefully,*	*don't*	*you?*

図9

A'/∃CORE		R'	
A	$V_{∃}$	$V_{∃}$	R
Harry	*will,*	*won't*	*you?*

図10

⑸では，ハリーは場面に登場しておらず，命題の代名詞heで言及されているのはハリーである。ハーマイオニーがtagでyouと言及しているのは，ロンである。話し手はハーマイオニー，聞き手はロン，認知の対象となって客体化されているのはハリーである。話し手が聞き手の命題に対する認識に差異がないことを確認している。ここでも，命題の認識のみを主要な関心事としているが，⑷のように同一指示ではないので，より典型から離れており，容認性の度合いも低い。しかしながら，命題について間主観的な認識を問題にしたいという話し手の意図をくみ取ることができる。図11に示されるように，命題がtagにより一つのまとまりを成し，同一指示ではないことで命題と聞き手との関係性が強いことを示唆しているのである。このようにグラウンドの一部であるyouが客体化されて，間主観的な認識調整を示す例となっているのである。

以上の考察は，典型例の分析と矛盾することではない。典型例とは異なり代名詞が照応していない拡張例では，間主観的な認識調整が主要な関心事となり直接的にオンステージにおかれる。それゆえ外の階層には，グラウンドの認知主体1である話し手が客体化されるI thinkのようなものと認知主体2である聞き手youがtagの一部として客体化されるものが共起しやすいと考えられる。この認知主体が客体化され間主観的認識調整をオンステージに置くという点において，tagと補文節がともに再帰性を示していると言える。以上の分析を踏まえて典型例を含めた再考察をすると，典型例では命題の再分析により認知主体2のメンタルスペースを捉えて間主観的認識的調整をオンステージに置き，代名詞非照応の拡張例では，メタ的に認知主体を捉えるような認知によって間主観的認識的調整を直接的にオンステージに置いていると考えられる。このようにして，代名詞が照応しない拡張に説明を与えることができると考える。

6．命題の節構造が形成されない拡張例の分析

次に，②前置される命題が節の形を成さないものについて考察する。先行研究では，このような談話においてのみ観察されるような事例について取り扱われてこなかった。しかしながら，実際の会話では，必ずしも節を形成しながら展開されるものではなく，むしろここで示すようなあいまいな形式であることが多い。ここでは，中村（2012）の認知モードのシフトに基づいて考察する。以下に事例を示す。

⑹ Told her not to have any of that, didn't I?
⑺ Sounds great, doesn't it?
⑻ Amazing, isn't it?
⑼ Almost certainly the eldest child — Theresa, wasn't it? — had been taught not to accept lifts from strangers, particularly men, and he was virtually a stranger.

A'/∃CORE			R'	
A	$V_{∃}$	R	$V_{∃}$	R
He	*'s*	*going to turn it over to professor Mcgonagal,*	*aren't*	*you?*

図11

⑹や⑺のようにdo語幹動詞で命題の主語がないものは95例，⑻のよう命題のCOREがないものは240例であった。このパターンの例文が拡張例として最も数が多く，be動詞tag全体の21％を占めており，主語のないパターンと合わせると拡張例においては63％を占めている。したがって，これらのパターンを単に形の崩れた事例として位置付けるのではなく，構造に認知的な動機づけがあると考えて分析を進める。

これらの構造は，3章でみたHope not. と同じく，命題に主語（Iやit）がない構造をとるのは，認知主体が観る側に徹して観られる側にないからではない。むしろ，認知主体が観られる側として意識されていないためである。LangackerやVerhagenの構造図では，この関係性は捉えきれないが，Iモードを導入することによって捉えることができる。

Anchoring Structureを用いて考察すれば，⑺および⑻の構造図（図12，13）では，はっきりとした階層性は観察されない。命題はA＞∃＞Rを成しておらず，命題とtagは，互いにその要素を必要とするので，2つの節が並列的に捉えられているということが示唆される。Anchorとして選び出されるべき主語は明示されず，tagによって最後に示されている。しかしながら，話し手の認識をそのまま順に表していると捉えるならば，ごく自然に受け入れられる。認知の主体であるIは，

(∃CORE)		R'	
$V_{∃}$	R	$V_{∃}$	R
Sounds	*great,*	*doesn't*	*it ?*

図12

(∃CORE)	R'	
A	$V_{∃}$	R
Amazing,	*isn't*	*it ?*

図13

認知の対象を共有しようという意図が生まれてから意識される。認識→共有意図の順に意識が流れているのと平行的に命題→tagと表現され，命題においては認知の主体が意識されず，客体化の対象にもなっていない。例文⑹においても，Anchorとして選び出されているtoldは，事態の中にグラウンドがあり，そこで認知主体が事態を経験していると仮定しなければStarting Pointとして想定できない。つまり，認知様式が図6で示されるIモードにあると言える。さらに共有意図が意識されることで，認知主体が外置されtagによってグラウンドとの関係が明確になると考えられる。tagにおける認知様式は図6で示されるDモードに移行している。このシフトをtagが表し，命題を一つのまとまりとして捉えるモノ化の認知能力そのものをスキーマという形で示していると考える。

中村（2012）では，認知モードと再帰性について次のように言及している。「Dモードの特性のなかでもメタ認知的側面が概念構造に階層性を生む。命題を上位の命題の中に（無限に）埋め込んでいく構造，再帰性の原理である。ラネカーの認知文法で言えば，命題を含む関係概念（relation）がモノ（thing）として認知的に捉え直されるということがあるために，言語の再帰性が自然に創発するということになる。再帰性の原理はモノ化能力，つまり，時間的に展開する概念内容を無時間的に全体として捉える能力にあり，これはIモードからDモードへの移行によって発現するものと考えられる。」この「再帰性の原理」をtagが担っている。なぜなら，「概念内容を全体として捉える」とは，概念内容をスキーマ化することと等しいと考えられるからである。したがって，tagの表れがシフトを引き起こし，階層性を生じさせているのである。

⑺から⑼の例では，命題には示されていないが，いずれもitが主語となっている。このことは認知主体が概念化の対象となる事態の場の内側にいることと矛盾しない。⑺では，主語が示されておらず，⑻ではCOREが示されていない。⑻で

は，事態の認知主体だけではなく，事態とグラウンドの位置関係も示されていないのである。これらの特徴は，いずれも命題ではIモード，tagではDモードの認知様式と合致する。

⑼では，Ｉモードの認知様式を巧みに取り入れることにより，より生き生きとした表現が生まれている。話し手の意識の流れのままに発話されていることがわかる例である。このような事態の内側から外側へ向かうインタラクションこそが付加疑問文を用いる認知的動機づけとなっているのである。

7．まとめと今後の課題

Anchoringによるフラクタル構造で付加疑問文を捉えることにより，tagが再分析とインタラクションの機能を担って階層性を示していると言える。これをもとに4000例を分析した結果，7割近くが典型例と確認されたが，2つの特徴を持った拡張例が多く存在することが分かった。代名詞が照応しない例と命題が節を成さない例である。これらの拡張例分析により，代名詞の非照応はtagがグラウンドとの関係性の一部を客体化して捉えたときに生じること，命題が節構造をなさないものはＩモードの認知様式を反映したものであることが示された。

概念内容のスキーマ化が認知様式のシフトを引き起こし，階層性を生じさせるというtagの機能は，典型例から拡張例に至るまで共通するものである。拡張例では，英語においても統語構造の中に階層性を含んでいない日本語のようなＩモード的表現形式があり，間主観的認識調整を動機づけとして認知モードのシフトが言語化されて後置される構造がみられる。この動機づけもまたグラウンドとの関係性の一部を客体化する拡張例においても，客体化しない典型例においても共通している。階層性の創発と間主観的認識調整が付加疑問文の機能と動機づけであると結論付ける。

今後の課題として，これらの階層性がrealityとどのように関わるのか，つまり，命題を話し手と聞き手がrealityという観点において，どう位置付けているかと表現形式との関連性（補文形式・付加疑問文・否定疑問文の選択，極性の選択）を明示化できるかということについて考察を深めていきたい。

【注】

1）一方，同極性を示す付加疑問文については，形式が一定ではなく，{命題，[助動詞＋極性＋代名詞？]}で示すことが難しいことに加え，機能面においても異極性のものとは大きく異なる。全体うち，極性が命題と一致するものは，否定tagには存在せず，be動詞では392例，do語幹では214例であった。これらの606例についての分析は今後の課題としたい。

【主要参考文献】

河野武（2011）『関連性モダリティの事象』東京：開拓社.

Langacker, Ronald W.(2001) "Discourse in Cognitive Grammar", *Cognitive Linguistics* 12 (2), pp. 143－188.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, New York.

Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter, New York.

Langacker, Ronald W. (to appear) "How to Build an English Clause".

中村芳久（2009）「認知モードの射程」『「内」と「外」の言語学』，坪本篤郎・早瀬尚子・和田尚明編，pp, 353－393, 東京：開拓社.

中村芳久（2010）「否定と（間）主観性―認知文法における否定―」『否定と言語理論』，加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美編，pp. 424－442, 東京：開拓社.

中村芳久（2012）「認知モード・言語類型・言語進

化—再帰性（recursion）との関連から—」
Kanazawa English Studies 28, pp. 285－299.
Näsblin, Siv (1984) "The English Tag Question: A Study of Sentence Containing Tags of the Type isn't it?, is it?", *Stockholm studies in English, 60.*
Tomasello, Michael (2008) *Origins of Human Communication*, The MIT Press, Cambridge, MA.（松井智子・岩田彩志訳 (2013)『コミュニケーションの起源を探る』東京: 勁草書房.）
Verhagen, Arie (2005) *Constructions of Intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*, Oxford University Press, Oxford.
Verhagen, Arie (2007) "Construal and Perspectivization", *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*, ed. by Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens, pp. 48-81, Oxford University Press, Oxford.
Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*, Cambridge University Press, Cambridge.

【例文出典】

「映画のシナリオ＆原作本を読もう」
http://www.h3.dion.ne.jp/~tango2/book.ha.html.
BNC：*British National Corpus.*